



ギリシャ神話由来の医学英語について

木村, 正史
山鳥, 崇

(Citation)

神戸大学医療技術短期大学部紀要, 9:1-17

(Issue Date)

1993

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/80070226>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80070226>



ギリシャ神話由来の医学英語について

木村正史¹, 山鳥 崇²

はじめに

医学英語はおゝむねギリシャ語又はラテン語に由来している。いわゆる西欧古典語と言われる古代ギリシャ語, ラテン語は学問的権威の象徴として中世時代よりヨーロッパ諸国で尊重されてきたことは周知の通りである。しかしながら, 医学や医療関係の職業に従事しようとする学生にとって何千とある西欧古典語由来の医学英語を暗記することは骨の折れることであり, 同時に退屈なことでもあろう。もし彼らにとって医学英語にまつわる面白いエピソードが授業中に一つでもあれば, 大変楽しく, 息抜きになることであろう。興味をおぼえた用語ならば, 一度聞けば生涯忘れられない思い出として残るのではないだろうか。例えば Adam's apple である。正式の用語では prominentia laryngea (喉頭隆起) であるが, 古来 Pomum Adami (ラテン語で「アダムリンゴ」という通称があり, 英語では Adam's apple, 日本語では「のど仏」といわれるものである。人類の始祖として旧約聖書に描かれているアダムがエデンの園から追放されるとき, 神から「お前はどこへ行くのか」と詰問されたので, アダムは驚きと恐れでその果実 (apple) の一部が食道に入らず, のどにつかえて留まったので, のど仏が生じた。つまり世の中の男性すべてが, その罪の遺伝で, この Adam's apple を持っているといわれる¹⁾。

このようなエピソードがあれば, 授業を受ける学生はいささかなり興味をもって聞けるのではないと思われる。幸いギリシャ,

ローマ神話に由来する医学英語で印象的なエピソードを持つものが数多く見受けられる。本稿は, そのうちギリシャ神話に登場する神々や人物に由来する医学英語19個をとりあげ, それにまつわるエピソードのあるものを出来るだけ紹介しつつ, その歴史的背景を論じようとするものである。あわせて, ギリシャ神話に由来する医学英語の一般的特徴について若干の考察を試みようと思う。

便宜上, 本稿で採りあげる医学英語を分野別に分類すると以下の通りである。

(A) 解剖学 (6)

1. Achilles'tendon 2. arachnoid
3. atlas 4. caput medusae
5. iris 6. hermaphroditism

(B) 病理学 (8)

1. aphrodisia 2. gigantism
3. heliosis 4. hypnotism
5. morphinism 6. nymphomania
7. priapism 8. satyr(iasis)

(C) 精神分析又は精神医学 (5)

1. Electra complex 2. eroticism
3. narcissism 4. Oedipus complex
5. psychiatry

上記の分類の順序にしたがい, 個々の英語の発音を記し, 由来と歴史的背景 (又はエピソード) を紹介し, 若干のコメントを加えたい。なお, エピソードについては, おゝむね Isaac Asimov, *Words From the Myths* (間二郎訳『ギリシャ・ローマ神話のことば』(共立出版)

1. 神戸大学医療技術短期大学部
School of Allied Medical Sciences, Kobe University
2. 神戸大学医学部
Kobe University School of Medicine

と山室静著『ギリシャ神話』（現代教養文庫），ならびに小林稔訳『ギリシャ神話小事典』（現代教養文庫）に依拠していることをあらかじめ断わっておく。

A. 解剖学用語

(1) Achilles' tendon [əkɪliːz tɛndən]

解剖学用語で用いられる Achilles' tendon 又は Achilles tendon の Achilles はギリシャ神話に登場する英雄の一人である。ギリシャ語の Akhilleús からラテン語の Achillēs を経て英語に入ったものである。わが国では通例ラテン語流にアキレスと呼んでいるが、ギリシャ語流に読めばアキレウスとなる。英語の発音では第二音節にストレスがくるので注意を要する。この伝説上の人物はペレウス (Peleus) と海の女神ティーティス (Thetis) の子で、トロイ戦争で大活躍をし、ホーマ (Homer) の詩篇イリアッド (Iliad) の主人公である。彼が生まれて間もない時、わが子を不死身にするために、母親のティーティスは彼のかかとを握ってスティックス (Styx) 川に浸した。ところが、母親が握っていたかかとが水に濡れなかったので弱点として残り、後にトロイ国の王子パリス (Paris) に、そこを射られて命をおとした。これにちなみ、英語では Achilles' heel, 又は Achilles heel, 又は heel of Achilles という表現がある。「アキレスのかかとのような弱点」と言うことになる。

この文学的な名前を初めて医学用語に持ちこんだのは小川鼎三氏によるとフランドル生まれの有名な解剖学者フェルヘイン (P. Verheyen, 1647–1710) である。彼は切断されて保存されていた自分の足を解剖した時、アキレス索 (Chorda Achillis) と名付けた²⁾。Achillis はラテン語形で2格である。このフェルヘインの用語 Chorda Achillis を今日の用語 Tendo Achills に変えたのがドイツの著名な外科兼解剖学者のハイステル (A. H. Heister, 1683–1758) で17世紀の終りから17世紀の初めの頃と

考えられている。この Tendo Achillis が英語に入って上記のように Achilles' tendon となったことは明白である。わが国では「アキレス腱」「踵骨腱」の訳語が与えられている。なお人体のアキレス腱は500キロの牽引力に堪えるという丈夫なものである。元来アキレス腱は人体の中でもっとも強力な腱であるから「ただの弱点でなく、甚だ強そうにみえて意外に脆いことのある場合を指すのでなければならぬ」³⁾とする小川氏の見解は、けだし卓見と言うべきであろう。

(2) arachnoid [əɾæknɔɪd]

解剖学用語の「くも膜」「蜘蛛膜」は英語で arachnoid 又は arachnoid membrane といい、「くも膜炎」は arachnitis [əɾæknáitis] という。上記の語のもとになった arachn- (母音の前にくる時) と arachno- (子音の前にくる時) の連結形はギリシャ神話に登場する少女アラクネ (Arachne) に由来している。「くも」(spider) を意味するギリシャ語の Aráchnē はラテン語の arachnē を経て英語の Arachne [əɾæknɪ] となっている。

アラクネは小アジア西部のリディア王国に住む、はた織りにすぐれた少女であった。彼女は自分の腕を自慢するあまり、実技の女神であるアテナ (Athena) に腕くらべを挑んだのである。アテナはこの挑戦を受けて立ち、両者はつづれ織りで腕を競うことになった。アラクネの作品はすばらしく出来上がったが、アテナの作品はそれ以上で、非の打ちどころがなかった。しかしアテナはアラクネの織りこんだ主題に立腹し、その織物を引き裂いてしまったので、アラクネは恐怖のあまり首をくくってしまった。アテナは無慈悲な神でなかったのも、そこまでひどい結末は望まず、その綱をゆるめてやり、アラクネをクモに変えてやった。クモの姿のアラクネは糸をつむいで美しいクモの巣を織りつづけ、まるでまだ首をくくろうとしているかのように、その細い糸にぶら下がり続けている。

以上がアラクネにまつわるエピソードである。この話は高慢をいましめるギリシャ神話に多く見られるものの一つで、高慢は七つの大罪のうちでも一番の重罪だと今なお考えられている⁴⁾。傲慢な態度を人間がとった場合、ギリシャ神話では必ず復讐の女神の手で罰を受けるように取りはからう。アラクネの話は「おごる者久しからず」(Pride goeth before a fall.) 流の、思いあがりをいましめた例である。

ところで解剖学では、クモの巣のように精巧微妙な膜状のものは arachnoid (クモの巣膜→クモ膜) といわれる。たとえば、脳や脊髄は2枚の膜で保護されている。この2枚の膜の間に、またもう1枚のごく薄い撰糸状の膜があり、これが arachnoid membrane (クモの巣状薄膜→クモ膜) と呼ばれている。この部位に炎症が起ると病理学用語の arachnitis [æɾæknáitis] (クモ膜炎) となる。クモ膜下出血 (subarachnoid hemorrhage) は致命的となる場合が多い。

動物学のなかにもアラクネの名前が残っている。クモ及びそれに近いダニやサソリの類は Arachne に発する arachnida [əɾæ knədə] (クモガタ綱, 蜘蛛形綱), 俗にいう「クモ類」としてまとめられているからである。英語では「クモ学」を arachnology (arachno+logy) といい、「クモ学の専門家」を arachnologist (arochno+logy+ist) という。

(3) atlas [ætɫəs, -læs]

医学で解剖学を学び始めると、まず atlas (図譜) を用意しなければならない。そして解剖学の第一歩である骨学が始まると、最初の方に出てくるのが第一頸推である環椎 (atlas) である。atlas はギリシャ語の atlao 「私は耐える」「私は支える」からきた語であると言われる。ギリシャ神話で Atlas と言えば天空を支えて立っている巨人の神様のことであるが、なぜ地図書や図譜をアトラスと呼ぶのかというと、西洋では古くから地図の表紙にアトラス神が地球をささえている図を描いていたからであるという⁵⁾。

またこのことから、人間の頭蓋を支えている第一頸推をアトラスと呼ぶようになったらしい。しかし日本や中国では、この骨は環状であることから環推 (日本)、あるいは寰椎 (中国) と呼んでいる⁶⁾。

ギリシャ神話では、アトラスはヤペトス (Iapetus) とオケアノス (Oceanus, 海洋の神) の娘クリメネ (Clymene) との間に生まれた。アトラスの兄弟にはプロメテウス (Prometheus), エピメテウス (Epimetheus) などがあったが、みんな巨大であった。ところで、この巨大な神達とゼウス (Zeus) との間に大戦争が起こった時、兄のプロメテウスは「先に考える者」というその名の通りゼウスが勝つことを見とおしてゼウス側についたが、少しのろまなアトラスは父のヤペトスと共にその時、神々の王になっていたクロノス (Cronus) について戦い、敗れた。このためクロノスやヤペトスは地の底の闇の深淵の地獄といわれるタルタロス (Tartarus) に投げこまれてしまい、アトラスには天が落ちることのないように、いつまでも天を支えているという罰が与えられた。そのために、いつも天を支えていると言われる⁷⁾。

このアトラスにも一回だけこのつらい罰から逃れられる機会があった。それはギリシャ第一の英雄豪傑といわれたヘラクレス (Hercules) が、金のリングをとるためにヘスペリデス (Hesperides) の園へ行く途中、その道を訊こうと天空を支えて立っているアトラスのところへ寄った時である。ヘラクレスにヘスペリデスの園への道を訊かれたアトラスは、「そこへ行くのはお前では無理だから、私が行ってとってきてやろう。その代わり、その間この天空を支えていてくれ。」と言って、ヘラクレスにその仕事を代わってもらい、首尾よくリングをとって帰ってきて、ヘラクレスに「天を支えるのは大変だ。依頼主にリングを届けてやるから、その間お前がこれを支えてくれ。」と頼んだが、賢いヘラクレスに一杯食わされてしまう。ヘラクレスは「貴方の言うことはもっともだ。こんな重いものはない。しかし貴方は長い間うまく

これを支えてきた。私は貴方が帰ってくるまでこれを支えてあげるの、ちょっとそのコツを教えてほしい。」と言ったのである。少しのろまで人の良いアトラスは「では教えてやろう。こう支えるのだ。」と言って天空を支えた途端、ヘラクレスに逃げられてしまったのだそうである⁸⁾。アトラスのつらい仕事は、地球と人類が滅亡するまで続くのであろうか。何とも人間的なアトラスに同情を禁じえない。

ところで、ギリシャ人は神話の霧に包まれたはるか西の地域、ジブラルタル海峡あたりにアトラスが立っていると考えた。やがて西方地域の探検が進んだ時、当然ながらアトラスの姿はなく、かわりに高い山々が聳え立っていた。それで彼らは、アトラスは過去のある時期に石にされてしまって、その姿がこの山々と決め込んでしまった。モロッコ (Morocco)、アルジェリア (Algeria)、チュニジア (Tunisia) の山岳地帯は今でも「アトラス山脈」(the Atlas Mountains) と呼ばれている。このほかにもアトラスの末裔にまつわる面白い話は多いが、話が長くなるので割愛する。

(4) caput medusae [kā:put mid(j)ū:si:]

解剖学用語として用いられる caput medusae (メドウサの頭) の medusa はギリシャ神話に登場する醜悪な恐ろしい怪物である。もとは若く美しい女であったが、女神アテナの怒りにふれてその美を奪われ、怪物に変えられてしまったのである⁹⁾。

医学における「メドウサの頭」とは腹壁の静脈が臍を中心として周辺に向かって怒張しているものをいう。これは肝門脈圧亢進症状の一つである。肝硬変などによって肝臓への門脈の流れが制限された時、心臓へ帰ろうとする腹部内臓からの血液は、大静脈への側副路を拡張させる。このような側副路の主なもの、食道下部の静脈 (食道静脈)、直腸下部の静脈 (下直腸静脈)、臍の周辺の静脈 (臍傍静脈) であるが、メドウサの頭の出現はこの第三の側副路の拡張

による。すなわち臍傍静脈へ入った血液が腹壁の皮下の静脈を通して上大静脈および下大静脈へ流入しようとするために、臍を中心に腹壁周辺へ放散する静脈が怒張して、メドウサの頭の毛 (蛇) のようになる。ちなみに第一の側副路が怒張すると食道静脈瘤、第二の側副路が怒張すると外痔核が出現する¹⁰⁾。

Medusa (原義は「守護者」) はギリシャ神話ではホレウス (Phoreus) とケト (Keto) の間に生まれた女子である。女神アテナに怪物に変えられたため、大きな黄金の翼を持ち頭髮は蛇になっており、それが何百匹となく身をくねらせ、歯は猪のようであった。醜悪な面相に加えて、その目でにらまれた者は誰でも石になったと言われる。メドウサは姉達のように不死身でなかったため、ゼウスの子のペルセウスに大鎌で首をかき切られて死んだ¹¹⁾。その時メドウサの翼あるいは首の切り株から生まれたのがペガサス (Pegasos) とクリューサオ (Chrysaoi) である。これらは神馬と呼ばれるものである。メドウサの首は女神アテナの持ち物になり、その盾の真中にはめ込まれたと言われる¹²⁾。

メドウサには同じように醜い顔の姉が二人おり、三人合わせて Gorgon と呼ばれる。ゴルゴンという名は「おそろしい」という意味のギリシャ語からきている¹³⁾。ところがゴルゴンは厄除けの神として祭られることになった。そのため、その首はゴルゴネイオン (Gorgoneion) と呼ばれ、盾や壁につけられた。このような経緯からメドウサの首は、今でも彫刻としてあちこちで見られるのであろう。

なおメドウサは、動物学の中にも入りこんでいる。植物を求めて動き廻る長い触糸をもつクラゲがあり、その触糸が体から生えている蛇のように見えるというので、これに medusa (クラゲ) の名がつけられている。caput medusae の medusae はこの medusa の 2 格である。

(5) iris [áris, áteris]

ギリシャ神話の神々にはさまざまな位があり、

一流, 二流, 三流に分けられている。オリュンポス (Olympus) の神々の大部分は一流に属しているけれども, 最高神ゼウスの子供達となると二流になる。二, 三流の神々とは神ほどの力はないが, 普通の人間よりはるかに優れた力を持っている¹⁴⁾。そのような二流の女神の一つに Iris (ギリシャ語, ラテン語流に読むとイリス, 英語流に読むとアイリス) がある。イリスは位は低い, ヘルメス (Hermes) 同様に神々の使者の役目をしていた。彼女は通例, 長い衣の上に軽い衣をまとい, 翼を持った姿で表されている。イリスは神々の言葉を人間に伝えるのが専門で, そのためしばしば下界へ降りて行かねばならなかった。そうするには虹の橋を渡って降りて行くのが理屈に合うのだが, はたして, この名前は「虹」という意味のギリシャ語であった¹⁵⁾。

虹といえば, その一番の特徴は, その多彩な色合いである。そこから他の多彩なものに使用されるようになっていく。解剖学でいう眼球の「虹彩」もその好例である。人間の目の色がさまざまで多彩であることから1712年, デンマークの学者 Jakob Benignus Winslow (1669-1760) が 'iris' 「虹彩」と命名した¹⁶⁾。そのほか, iris は「アヤメ」や「ハナショウブ」などアヤメ科の色とりどりの大きな花をもつ植物の科名としても使われているし, iris blue (アイリスの花のような色) のように色名にも使われている。

ギリシャ語の iris の複数形は irides であるが, この 'd' を含む形が英語のいくつかの語にあらわれている。例えば水面に浮いた油のうすい膜, 石鱗の泡, アコヤ貝などの真珠層などは, 見るときの角度次第で色々に変化する色模様が見られる。これを英語では iridescence [irədésns | iri-] 「虹色」「玉虫色」といい, その形容詞形を iridescent [irədésnt | iri-] と言う。

なお, 眼科学用語に「虹彩切除 (術)」を意味する iridectomy [irədé ktəmi] がある。イリスに由来する 'irido-' と ectomy (「…切除 (術)」の意の名詞連結形) より構成されている語である (cf. appendectomy, gastrectomy)。

- (6) hermaphrodism [hə:mæfrədizm]
hermaphroditism [hə:mæfrədaitizm]

医学用語で用いられているヘルマフロディズムは, わが国では「半陰陽」(又は「雌雄同体現象」)と訳されている。半陰陽とは性の分化の異常のため, 外性器が異性の形に近づいたり, 性腺, 内性器とも両性のものが共存したりするもの, つまり男女の判別が一見してわからないものをいう。このなかでも両方の性的特徴 (精巣と卵巣) を持っているものを真性半陰陽, 形は両方のものを持っているようでも機能が一方の性になっているものを仮性半陰陽という¹⁷⁾。また半陰陽の人を特に「半陰陽者」(hermaphrodite) と呼ぶことがある¹⁸⁾。

hermaphrodism を語源的にみると, ゼウス (Zeus) とマイア (Maia) の子で神々の使者, 商業, 発明の神であるヘルメス (Hermes) と, 愛の女神のアフロデーテ (Aphrodite) の混成語である。Herm(es) + Aphrod(ite) + -ism よりなる言語学でいう blend word, portmanteau word (カバン語) である。このヘルメスとアフロデーテの間に生まれた子供がヘルマフロディトス (Hermaphroditos) と呼ばれ, この子は小アジアのイーデー山の中で, 妖精達ニンファ (nympha) に育てられて美少年になった。ある日, このヘルマフロディトスがサルマキスという泉で水浴びをしていたところ, その泉に住んでいた妖精に恋をされてしまった。ヘルマフロディトスはその愛を拒んだが, 拒まれた妖精はそれでもヘルマフロディトスに抱きついた。そして永遠に一緒にになりたいと神々に祈ったところ, 二人は男性と女性の性器を持った一体の人間になったという¹⁹⁾。半陰陽は神話の時代からすでに存在していたらしい。

B. 病理学用語

- (1) aphrodisia [æfrədīziə | -ziə]

ギリシャ神話に登場する Aphrodite [æfrədáiti] は恋愛と美の女神である。一説による

とアフロデーテはウラノス (Uranos) とガイア (Gaia) の娘で、帆立貝に乗り、海の泡から姿を現わしたことになる。ギリシャ語の *aphros* は「泡」(foam) を意味する。また一説によればギリシャ人がオリュンポス (Olympus) にやってくる以前に先住民族によって崇拝されていた女神で、この在来の女神をギリシャ人はゼウスと Titan 族の女神ディオネ (Dione) の娘ということにして、オリュンポスの一族に加えたと言われる²⁰⁾。ともかくギリシャ人はアフロデーテを女神の中で最も美しい存在と考え、美と恋愛の女神とした。ただし肉体的な愛は Aphrodite に、精神的な愛は Psyche [sā iki] にそれぞれ分業させていた。(Psyche はわが国ではギリシャ語流にプシュケ、プシケと呼ばれているが、英語流に読めばサイキとなる。) それ故、肉体的な愛、性愛を高じさせる薬、つまり媚薬として Aphrodite から派生した *aphrodisiac* があり、病理学用語の性欲高進、性的興奮は *aphrodisia* である。

ところで、ローマ人は自分達の美の女神ヴィーナス (Venus) をアフロデーテと同一視したのである。われわれにはヴィーナス (Venus) の方が身近な存在となっている。ローマ人はヴィーナスにたいへん敬意を表していたので *venerate* (敬い尊ぶ) とか *venerable* (尊い) という語を Venus から派生させている。しかし一方ではヴィーナスに性愛 (sexual love) の役目をも持たせていたので、*venom* (毒)、*venomous* (有毒の) や *venereal* [rən'riəl] (性病の、性交の) などの語を Venus から創り出している。したがって *venereal disease* とは「性病」を意味する。

- (2) *gigantism* [dʒâ'gæntizm]
giantism [dʒâ'iæntizm]

病理学用語として用いられる「巨人症」の *gigantism* 又は *giantism* はギリシャ神話に登場する巨人族 (Gigantes) のギガス (Gigas) に由来している。ギガンテス (Gigantes) はウ

ラノス (Uranos) の流した血でガイア (Gaia) が身ごもって生まれた巨人族である。彼らは人間の頭に腰から下は竜の姿で表される。巨大な体と巨大な力を備えた狂暴な存在で、恐らく自然のもつ破壊的な力を表したものとされる²¹⁾。Gigas に由来する合成語には「巨人症」のほかにも次のものがある。

gigantoblast (giganto+blast) 巨大赤芽球
gigantocyte (giganto+kytos) 巨大細胞
gigantomastia (giganto+mastos) 巨大乳房

すでに、アトラスの項で述べたように、ゼウスを中心とするオリュンポスの神々とギガス族と呼ばれる巨大な神々との間に激しい戦争が再び起こった。それは最初の戦いに敗れた神々の親族の復讐戦であった。しかし結局はギガス族がまた敗れ、最高神ゼウスをはじめとするオリュンポスの神々が、その地位を守ることになる。敗れた者達は山の下に押えつけられてしまったが、それでもなお、山の下から火を噴きつづけた。そしてそれは今も続いている。それらがシチリア島にあるエトナ山 (Mt. Etna) であり、イタリア半島のナポリの近くにあるベスビオス山 (Mt. Vesuvius) であるという²²⁾。

- (3) *heliosis* [hī:lióusis | -liǎusis]

病理学用語の *heliosis* (日射病) には太陽の神、あるいは太陽そのものと考えられている Helios [hī:liǎs | iǎs] が含まれている。ヘーリオスは太陽神ヒュペリオン (Hyperion) とティア (Theia) の息子である。その妹に月の女神のセレネ (Selene) と曙の女神エオス (Eos, ローマ神話の Aurora に当たる) がいる。ヘーリオスは金の馬車に乗って焰を吐きながら天空を東から西に駆けつたあと、金の盃に乗り込み、一晩かかって西から東にもどり、翌日の旅に備えたという²³⁾。ゼウスが彼に自分の島を与え、それを太陽の島と名づけたという話もある。だがヘーリオスは自分の愛していた妖精の名前を

与えてロードス島 (Rhodos) と呼んだ。この島は今日も Rhode Island として知られている。世界の七不思議の一つ、ロードスの巨像はロードスの彫刻家カレスによって刻まれた70フィートのヘーリオスの像であった。ヘーリオスはさまざまな格づけで擬人化されている。だが、どの場合もヘーリオスは人々に愛される神であったことは注目してよい。

上記の heliosis は helio と -osis (状態) の合成語で日射病を表すが、英語では俗に日射病を sunstroke とも言っている。「太陽、陽光」の意の連結形 helio- をもつ医学用語を以下に若干紹介しておく。

helioaerotherapy (helio+aeros, 大気,
+therapeia 治療) 日光大気療法
heliopathy (helio+pathos 苦痛) 日光性障害
heliophobia (helio+phobos 恐れ) 日光恐怖症
heliotherapy (helio+therapeia) 日光療法

- (4) hypnotism [hípnɒtɪzm]
hypnosis [hɪpnóusɪs]

暗示や薬によって生じさせる人為的な眠りは hypnosis (催眠状態) であり、hypnotic は形容詞としては「催眠の」の意と、名詞として「睡眠剤」の意がある。これらの語に含まれる hypno- は眠りの神ヒュプノス (Hypnos) に由来している。ヒュプノスは死の神タナトス (Thanatos) と双子の兄弟である。彼は人間への愛情にみちて、静かにとびまわる神として描かれている。というのもギリシャ人は死に対してやさしい一面を認めていたからだと考えられている²⁰⁾。長くものうい一生の後で、死は休息とさえ感じられたのだ。というわけで、彼らはタナトスとヒュプノスを兄弟であるとしたのである。ところで、Hypnos 由来の「眠り」「催眠」の意の連結形 hypno- をもつ医学用語、心理学用語を hypnosis (=hypnotism) 以外に探せば、次のような語がある。

hypnoanalysis (hypno+analysis) 催眠分析
hypnology (hypno+logy) 睡眠学
hypnotherapy (hypno+therapeia) 催眠(術)療法
hypnopedia (hypno+pedia) 睡眠学習
hypnotoid (hypnotic)+ -oid 「～のような」
「類催眠性(の)」 「催眠に似た」

ローマ神話にもヒュプノスに当たる眠りの神ソムヌス (Somnus) がある²⁰⁾。このソムヌスに由来する病理学の用語に somnambulism [sɒmnæmbjʊlɪzəm] (夢遊病), somnambulist (夢遊病患者), somnambulant (夢遊病の、夢遊病患者), somnolence [sɒmnələns] (傾眠) がある。「不眠症」を意味する insomnia が in- (否定を表わす連結形)+somnus+ -ia (不活性を表わす連結形) よりなる合成語であることは明白であろう。「不眠症患者」は insomniac [ɪnsɒmniæk] である。

- (5) morphinism [mɔːfiːnɪzəm]

病理学の用語で「モルヒネ中毒」を表わす morphinism や morphinomania, 「モルヒネ中毒者」を表わす morphinist や morphinomaniac にはヒュプノスの息子であるモルペウスが含まれている。Morpheus [mɔːfiəs] はわが国ではモルペウスとして知られているが、原義は「写像を呼び起こす人、又は物」(fashioner) である²⁰⁾。この神は睡眠者に影像 (form) を呼び起こすという考えから「夢の神」といわれる。つまり夢は心の眼にうつる姿、形であるから、生物学の一部門や言語学の用語として morphology (形態学) が用いられている。「形のない」ことをギリシャ語由来の否定辞 a- をつけて amorphous とか amorphism という語も作られている。

この夢の神は化学の中に興味深い痕跡を止めている。1803年、ドイツの化学者ゼルチュルナー F.W. Sertürner (1783-1841) が天然用植物からはじめて純粋化合物を分離した。これは強力

な睡眠剤で、激痛に苦しむ人々に安らぎと眠りを与えてくれた。丁度、モルベウス自身がお出ましになって病人を抱きよせて下さるといった感じなので、この化合物は Morpheus から eus を省略した morph とアルカロイドを表わす名詞をつくる語尾の ‘-ine’ を合成してモルヒネ (morphine) [mɔ:finə] と名づけられた²⁹⁾。しかし、この薬品は常用すると中毒症状を起こす劇薬である。したがって「モルヒネ中毒患者」を表わす morphinism, morphinomaniac のような語が生まれたのである。

- (6) nymphomania [nɪmfəmə'iniə]
nymphae [nɪmfi:]

ギリシャ神話にはニンフ (nymph) と呼ばれる妖精が自然のさまざまな象徴として登場する。川や海に住むニンフもいれば、山や森に住むニンフもいた。nymph [nɪmf] とはギリシャ語のニュムペー (númphē) に由来し、もともと「花嫁」(bride) を意味したが、その後一般に「若い娘」を意味するようになった³⁰⁾。わが国では「妖精」や「～の精」の訳語で通っている。彼女らは、いわば、ある特定の木や泉や小川や森の精であった。したがって彼女らの住み家となる場所は異なるが、彼女らに共通する点は歌と踊りを好んだことであった。彼女らはパン (Pan, 牧神) やサティリア (Satyria, 後述) やディオニュソス (Dionūsos, 酒と演劇の神) などの踊りと恋の相手であった。人間に恋することもあり、思うようにならないと怒ったり、罰したりした。このように多情さの高じた女性を病理学用語で nymphomania (女子色情症) という。語形成の面からみると nymph + -mania (「・・・狂」) の意味を表わす名詞連結形からなり立っている。女子の色情症患者は nymphomaniac と呼ばれる。なお nymph に由来する解剖学用語に nymphae [nɪmfi:] がある。nymph の複数形で「小陰唇」(labia minora) を意味する。どうして nymph 由来の医学用語に性や性器に関するものが多いのか不思議とい

えば不思議であるが、神々の娘たちで、永遠に若く、永遠に美しいニンフたちが裸で髪に花をかまらせ、神や半神に追われたり、洞穴や湖や森で人間たちに出会って恋をするさまは、ギリシャ神話に独特の異教的色彩と香りを添えている。

- (7) priapism [praɪ'ɪəpɪsm]

病理学で用いられるプリアピズム (priapism) はディオニュソスとアフロデーテの息子プリアポス (Priapus) [praɪə'ɪpəs] にちなんで命名されている。彼は男性生殖力の神と見なされ、もっぱら豊饒を奨めた小神である。priapism は通例 (有痛性) の持続勃起 (症) を意味するが、必ずしも性欲に起因しないとある³¹⁾。語形成から見るとギリシャ語名の Priāpos がラテン語に入って Priapus となり、そのまゝの形で英語に入ったが priapus + ism は言いにくいので priapus の語尾 ‘-us’ を省略し、priapism になったと考えられる。

プリアポスは小柄で奇怪な身体であったにもかかわらず、ペニス (penis) だけは異常に大きかったので母親のアフロデーテには、悲しいことに息子と認めてもらえなかった。また、いたずら好きだったため、両親のいずれからも愛されなかった。仕方なくプリアポスは父ディオニュソスの従者となってニンフを追いかけてまわしたと言われる。彼を見て逃げ出すニンフがいたら——実を言うとニンフたちは皆、逃げ出したのだが——彼は自分の男根を切って、投げ槍のようにそれを投げつけたともいう³²⁾。このようなわけで小文字で表わされる priapus は ‘phallus’ (男根) を表わす。phallus は解剖学、精神分析学の用語としても多用されている。ただし phallus には「男根像」の意もあり、古代ギリシャでは造化の生産力の象徴として崇拝され、ディオニュソス祭、すなわち、バッカス (Bacchus) 祭ではこれをつぎ回ったといわれる。ギリシャ神話の神々は何とも大らかで人間的であった。

(8) satyriasis [sèitērāiæsis]

女子の色情症 nymphomania に対する病理学の用語に satyriasis がある。この語のもとになっているのは半人半獣の森の神の一人であるサテュロス (Saturos) である。サテュロスには「種をまく人」(sower) の原義があり、ディオニュソスの従者でローマ神話のファウヌス (faun, 牧神) に当たる³⁰⁾。頭には短い角を生やし、やぎ足をしていて酒と女が大好物ときている。彼の色好みが高じると「男子色情症」の satyriasis となる。語形変化の過程を見ると、ギリシャ語名の Saturos がラテン語に入って satyrus と変化し、それがフランス語に入って satyre となり、さらに英語に入って satyr [sé itə (r)] となっている。satyr は「好色家」「男子性欲亢進患者」つまり「色情狂」を意味するが、これに病名によく用いられ、ギリシャ語系名詞をつくる '-iasis' (「…に似た状態, 特徴」の意味を表わす) をつけて satyriasis の病名が出来ている。

C. 精神分析学または精神医学用語

(1) Electra [ɪléktrə] complex [kɒmpleks]

スイスの精神医学者で心理学者の Carl Jung (1876-1961) が命名した用語にエレクトラ・コンプレックス (Electra complex) がある。これは4～6才の女の子の両親に対する態度の中にエディプス・コンプレックス (Oedipus complex) に相当する同性の親への敵意や異性の親への愛着が認められるとしてユングが名付けた観念複合体である³²⁾。この Electra complex の Electra はミケーナの王アガメムノン (Agamemnon) の娘の名に由来する。彼女は父親を大変愛していた。父がトロイ戦争に出征している間に、母は孤閨を守れずアイギストスと通じた。やがて父が帰国した時、母とその情夫は父を殺害した。エレクトラは復讐を誓った。彼女は殺害の行われた夜、弟オレステス (Orestes) を

城から連れ出した。アイギストスが弟も殺そうとしているのを知ったからである。彼女は弟を隣国に残してミケーナに戻り、母親とその情夫に対する憎しみを隠して母思いの娘であるふりをしていた。そして弟のオレステスが成人した時、流浪の地から呼び戻し、自分の抱いている憎しみの情を彼の心の中にかき立てさせた。その夜、オレステスは拔身の剣をひきさげて王の寝室に侵入し、母親とアイギストスを殺し、父の敵を討った³³⁾。

エレクトラの話は後述するオエディプス (又はエディプス) の話と異なり、無意識でなく、最初から意識して母への復讐を計画し、これを実行している。オエディプスのように知らずして、無意識のうちに悲劇が行われたわけではない。この点から考えると、男性よりも女性の方が復讐心ははるかに強烈で、恐ろしいように思える。世の男性諸氏に対し、このエレクトラの話は、ゆめ女性の復讐心を甘く見てはならないと警告しているのかもしれない。

ところで Electra は琥珀 (amber) のことで、その琥珀色が彼女のすばらしい目の色であった。英語の electric (電気の、電気を帯びた) や electricity (電気) は、この情熱的な娘の名に由来する。その不思議な力は、琥珀を絹布でこすることにより生じたからである³⁴⁾。

(2) eroticism [ɪrɒtɪsɪzəm, ɪrɒtɪsəzəm]
erotism [érɒtɪzəm]

精神分析学の用語として eroticism (異常な性欲昂進) がある。語形成の面から見ると, erotic (性愛の、性欲をかきたてる) + -ism よりなる合成語である。しかし erotic も eroticism も、もともとギリシャ神話の恋愛の神エロス (Eros) に由来する。したがって、ロマンチックな愛の気持をかきたてるものは、すべて erotic [ɪrátik] だといわれる。

エロスは普通ほっそりとした、翼のある、弓矢を持った青年として描かれる。この矢は魔法の矢で、男でも女でも金の矢で射られると、エ

ロスの選んだ相手が誰であろうと激しく恋するようになる。また鉛の矢で射られた者は、激しい憎しみを抱くようになる。多くの物語では、エロスはゼウスとアフロデーテの息子ということになっている。だがゼウスは本妻のヘラ (Hera) の怒りを恐れ、エロスは虹の女神イリスから生まれ、父親は西風のゼピュロス (Zephyrus) だというわさを流したという³⁰⁾。真相はともかく、彼はアフロデーテに大変な献身と技をもって仕え、アフロデーテは彼を、報償や報復のため自分の手先として用いた。

このように描かれたエロスだが、精神分析ではエロスを「生の本能」すなわち「リビドーに由来する性的快楽と自己保存を目的とする本能」の意で用いている³⁰⁾。したがってエロスには性愛 (sexual love) の役目を持たせて erotism, eroticism も使用されている。一方ローマ神話の Cupid (ギリシャ神話の Eros に当たる) には性愛より、むしろ、お金や物をむやみに愛する強欲の役目をもたせて cupidity (強欲) などという語をつくり出している。愛といっても、意味するところはさまざまであることを示唆している。なお、キューピッドとプシュケの印象深い話については psychiatry の項で詳述することにする。

(3) narcissism [nɑːsəsɪzəm|nɑːsɪsɪzəm]

精神分析学の用語で narcissism は「自己愛」と訳され、「リビドー (libido) が他者へ向けられず、自己に向けられていること」と定義づけられている³⁰⁾。H.Ellis (1989) は自己の肉体に性的興奮を感じる一種の性倒錯、つまり自体愛 (autoerotism) を水面に映る自分の姿に恋した青年ナルキッソス (Narkissos) のギリシャ神話にたとえたが、P. Näcke (1899) はこの倒錯心理を narzissism と呼んだ。S. Freud は『ナルチズム入門』で、ナルチズムの概念はネッケによると書き、1920年になってエリス (Ellis) の造語であったと述べている由である³⁰⁾。しかし、この概念が精神医学での重要な概念として

の市民権を持つに至ったのは Freud によってであるといわれる。

英語の narcissism はドイツ語名の Narzissismus (Narzissmus) から入ったものである。しかし元来はギリシャ語の Narkissos からラテン語に入って Narcissus となり、さらに英語に入って -ism と合成される際に ‘-us’ が省略されて narciss+ -ism になったと考えられる。

ナルキッソスと山のニンフのエコー (Echo, ギリシャ語で「音」の意) の話も興味深いものがある。エコーは心のやさしい妖精で、ゼウスは彼女がヘラの監視から逃れるのを助けた。女神のヘラはこれを聞いて怒り、エコーが自分では口がきけないようにし、ただ話かけた人の最後の台詞だけを繰り返すことを彼女に許した。このため、エコーは、美男で、うめぼれ屋のナルキッソス (ナルシス) にうまく言い寄ることできなかった。ナルキッソスはエコーの話を見届けたと思ったのである。彼女は恋の病いにやせ細ってゆき、とうとう声だけしか残らなくなった。その声は、このニンフが住んでいた山や谷間で今も聞くことができ、“echo” (こだま) としてその名を伝えている。

一方、エコーを邪険に扱い、頭から馬鹿にしたナルキッソスにも、応報の天罰がくだされることになった。彼はある時、泉の水に映った自分の顔をはじめて見て、それが自分とは気づかず、ついにわが身に恋する羽目におちいったのである。恋にやつれたナルキッソスは、やがて泉に落ちて死んでしまい、美しい花になった。この花は、今もその名をとどめて narcissus (水仙) と呼ばれている³⁰⁾。今でも、極端にうめぼれが強く、自己中心的、自己陶醉的なことを narcissistic といい、自己陶醉者を narcissist 又は narciss と言う。

(4) Oedipus [éˈdɪpəs, ɪˈdɪ-] complex

「親母複合」と訳されるエディプス・コンプレックスは、フロイドによって明らかにされた無意識心理に関する精神分析の基本概念の一つ

である。前述のエレクトラ・コンプレックス（「親父複合」）に対応する用語。フロイトは幼児にも性的なものが存在すると考え、幼児は3～4才になると精神・性的発達上の男根期（phallic stage）に入り、それが6～7才まで続くとした。幼児はこの時期に入ると性の区別に目覚め、異性の親に性的な関心を抱くようになる。特に男の子は、母に対して性欲の萌しを感じ、父を恋敵とみなして父を嫉妬し、父の不在や死を願うようになる。反面、彼は父を愛してもいるため、自分の抱いている敵意を苦痛に感じ、またその敵意のせいで父によって処罰されるのではないかという去勢不安を抱くに至る。このような、異性の親に対する愛着、同性の親への敵意、罰せられる不安の3点を中心として発展する観念複合体を、フロイトは1900年エディプス・コンプレックスと命名した⁴⁰⁾。この名称は、それと知らずに父を殺し、それと知らずに母と結婚したソフォクレス作『エディプス王』の悲劇に由来している。

エディプスはテーベ（Thebes）の王ライオスの息子である。ライオス王は「自分の息子に殺されるであろう」という神託を受けて、エディプスの踵にピンを通してコリントの山に棄てた。ところがエディプスは親切な羊飼いに拾われ、羊飼いは彼を家に連れて帰るとわが子同様に育て、Oedipus すなわち「腫れた足」（oideo ‘to swell’ + pous ‘foot’）と名付けた。のちに成人したエディプスはコリント王に子供がなかったため、養子として迎えられたが、デルポイの神託所を訪れたとき、「自分が父親を殺し、母と結婚する」ことを告げられた。彼はほかには両親を知らなかったため、この神託を養父母にかゝわる警告であると考え、コリントには帰らず流浪の徒となった。彼が、デルポイをあとにして狭い山道を行くと、道がライオス王の車でふさがれ、ライオス王が彼を力づくで押し除けようとしたため格闘になり、ライオスを実父と知らずに殺してしまった。

やがてテーベにやってきたエディプスは、この国がスフィンクス（Sphinx）という怪物に

苦しめられていることを知った。怪物は謎をかけ、それを解けないテーベ人を片はしから食いつくしていた。「四足、二足、三足になってゆく動物は何か」というスフィンクスの謎にエディプスは「それは人間だ」と見事に解答したので、怪物は城山より谷へ身を投じた。彼は乞われて王になり、寡婦であった王妃（実母）は彼の妻となった。彼らは何年かの間、たいへん幸せに暮らしたが、やがて、あるとき疫病が国土を襲った。エディプスはテーベからこの疫病を追い出そうとして、神託に伺いをたてたところ、疾病は彼自身が原因に外ならず、父を殺し、母と結婚して古い昔からの禁制を破ったためであるということだった。罪の恐ろしさにかぐ然としたエディプス王は己の目をえぐり、テーベを去る。母は首をくくった。エディプスは実母との間にできたアンティゴネー（Antigone）に手をとられ、流浪の旅を重ね、アッティカ（Attica）の地で雷鳴のとどろく中で息を引きとった。

以上が有名なギリシャ悲劇の荒筋だが、細部にいたっては数々の異説がある。それはともかくとして、エレクトラの場合とくらべて大きく異なっている点は、先述のように、エディプスの場合はそれと知らずに父を殺し、それと知らずに母と結婚したということである。悲劇性はエディプス王の方がはるかに大きく、深いものがある。掟を破った罪と罰に対する古代ギリシャ人の考え方が反映していて興味深い。ただ一つ救われるのは、悲劇的な死を遂げたエディプス王ではあったが、アテネの英雄テセウス（Theseus）の手によって厚く葬られたことである。

(5) psychiatry [sɪkəˈiətri, sə-|saɪkəˈiətri]

「精神医学」と訳されるサイアトリー（psychiatry）は1808年、ライル（Johann Christian Reil）が最初に用いたといわれる。人体器官の精神的、機械的、物理化学的感受性に応じて、この三方面からの治療法がすべての疾患に適用さるべきと彼は考えた。語形成がらみると、

psychiatry は psycho-+iatry (医療, medical treatment) の合成語である。この語の前半に含まれる psycho はギリシャ神話のプシュケー (Psūkhē) からきている。Psūkhē はラテン語に入って Psychē (プシケ) となり、さらに英語に入り, Psyche (サイキ) となった。その際、語頭の p は silent letter (黙字) となっている。ただし、我が国では「サイケ」と呼ばれている。

プシケについてはアモール (Amor, 愛) とプシケ (Psyche, 精神, 霊魂) という有名な物語がある。これは紀元150年ごろ、ローマの詩人ルキウス・アプレイウス (Lucius Apuleius) が作ったもので、純粋なギリシャ神話ではない⁴³⁾。アモール (いかにもローマ風な神の名) はキューピッドとして、われわれによりよく知られているが、本稿ではアモールとプシケの美しい恋の物語として紹介したい。

あるところに三人の娘を持った王様がいた。娘は三人とも美しかったが、なかでも末娘のプシケは一段と美しかった。その美しさは美の女神ヴィーナスをしのいだので、ヴィーナスはプシケを嫉妬した。それでヴィーナスは息子のアモールを呼んで、「お前の弓であの娘を射ち、世界一醜い男に恋をするようにさせてくれ。」と頼んだ。アモールは翼をもった美しい若者であった。彼の弓の矢で射られた者はたちまち恋のとりこになってしまうのであった。アモールは早速プシケのところへ行ったが、彼女を見ると自分が恋のとりこになってしまった。そして彼女を自分のものにしようとした。それで彼女に男を近づけないようにした。プシケの姉達は幸福な結婚をしたのに、プシケに結婚を申し込む男のいないことを心配した父の王は、アポロン (Apollon) の神に彼女の良縁を依頼した。アポロンはその父王に「プシケに喪服を着せて、岩山の頂上におけ。そうすると翼のある蛇が来て、彼女をよい所へ連れて行くだろう。」と言った。両親はプシケを可愛想に思いながらもそれに従った。

一人で山頂に残されたプシケは夜になると淋しい思いをしたが、その時、気持のよい西風が

吹いて空中に持ち上げられた。そして香ばしい花に満ちた草原に運ばれ、安らかな眠りに入った。目が覚めるとプシケは美しい宮殿にいた。風呂も食事もある立派なものであり、どこからともなしに聞こえる声に命じられて一人ですませた。その間、人の姿は見えなかった。夜になると何かは見えないが、彼女の待ちこがれていた夫らしいものが来て、彼女を愛撫した。プシケは見えない夫に毎夜愛されて幸福な生活を送った。ある時、彼はプシケに言った。「間もなくお前の姉達がお前を探しに来る。しかし決して姿を見せてはいけない。」と。しかしプシケは姉達に会いたいと思った。それを察した彼は、「会いたいのなら、お前が会うのは仕方がない。しかし絶対に私の姿を見ても、見せてもいけない。そんなことをすると、お前が不幸に会うからだ。」と言った。

プシケはその言葉に従うことを誓った。しかし姉達に「お前はまだ夫の姿を見たことがないのだろう。お前の夫が姿を見せないのはアポロンの言った蛇であるからに違いない。今優しくしていても何時か正体を現して、お前を食べてしまうだろう。」と言われると不安になり、夫の正体を見ようとして、姉達に言われた通り、夫が寝静まるのを待って夫の寝台の近くへ行き、隠し持っていたランプに火をつけた。もし夫が蛇であつたら刺し殺してしまおうと、手にはナイフも持っていた。しかしプシケが見たものは蛇ではなかった。そこに眠っていたのは見たこともない美しい若者であった。彼女は姉達にそそのかされて夫を疑ったことを悔いて、夫の足もとにひれ伏してわが身にナイフを突き立てようとした。その時、ランプから熱い油が一滴夫の裸の肩に落ちて、夫は目を覚ました。

途端に夫は無言ではね起き、真暗な戸外へ走り去った。プシケは夢中でその後を追いかけた。すると姿は見えなかったが、なつかしい夫の聲が聞こえた。彼は自分が愛の神アモールであると名乗った。そして自分は出て行かねばならないのだと言った。「愛は信頼のないところでは生きられないからだ。」と。それきり、彼の姿

は消えて、声も聞こえなくなってしまった。

プシケは泣く泣く姑のヴィーナスの所へ行って許しを乞うた。そして、ヴィーナスの課した色々な試練を受けた。その後、やっと最高神ゼウスの計らいで、アモールと正式に結婚し、不死の体にしてもらって天上でいつまでもアモールとともに暮らした⁴⁰⁾。

ところで、これは単なる恋の物語ではない。psycheとはギリシャ語で「靈魂」(soul)を意味する言葉であり、話の背後に深い意味がひそんでいる。本来、愛(アモール)が住む天上の住人でもある靈魂(サイケ)が、ある期間、悲惨と困難に出会いながら地上をさまよう運命を与えられる。しかし終始まごころを持ち続けられ、ついには天に帰って愛と結ばれるであろう、というのがこの物語の寓意と考えられている⁴⁰⁾。

“psyche”という言葉は、「心」とか「靈魂」の意味で英語の中にも入っている。psychology(心理学), psychiatrist(精神科医), psychotherapy(精神療法)などがある。また、耳、目、その他ふつうの感覚器官よりも、むしろ心で物事を知覚するタイプの人は、“psyche”(心霊的)だといわれる。

結 語

現在欧米で用いられている医学用語は、古代ギリシャ語か、ラテン語を基本にして作られている。解剖学では国際的な学名がラテン語で表示されているが、その中にもギリシャ語を源にするものが意外に多い。歴史的にみればギリシャ語の方が古く、その神話は西洋における色々な物語の源となっているので、けだし当然であろう。

数多い医学用語の中から、本稿では特にギリシャ神話、伝説の神々、英雄、怪物、人間にまつわる医学用語を19個えらび出し、これを解剖学、病理学、精神分析または精神医学の三分野に分類して紹介した。ただし19個の医学用語にはギリシャ神話の神々や英雄、人間がそのまゝの形で使われているのは6個で、他の13個は合

成語で使用されている。内容的には、病理学、精神分析または精神医学の分野の語に性(sex)にまつわる話が多く、それに関する言葉の多いことが特徴である。これは古代ギリシャの神々が野性的で、かつ人間的であったことと関係があるのかも知れない。彼等は時には優しく、時には残忍であり、またおおらかである。ギリシャ神話の神々は日本神話の神々をどこか彷彿させるところがあって興味深い。

ともあれ、本稿でとりあげた医学英語の起源を辿ると3,000年以上の古代ギリシャに遡ることが判明する。同時に古代ギリシャ人の自然観や宇宙観が垣間みられる。古代ギリシャ人は何と生き生きとした想像力を持った、文学的才能に恵まれた国民であったことか。上記の医学用語にまつわる数々のエピソードは如実にそれを物語っている。言葉の持つ歴史を知ることとは、その意味をさらに深く理解することにつながるであろう。

引用文献

1. 小川鼎三：医学用語の起こり：東京書籍，1982，p.97.
2. 小川鼎三：同上：p.66.
3. 小川鼎三：同上：p.65.
4. Asimov I: *Words From the Myths*, Houghton Mifflin Company, 1961.
(間 二郎訳：ギリシャ・ローマ神話のことは、共立出版，1969，p.13)
5. 森 優：解剖学漫歩：非売品，1964，p.20.
6. 郑 思竟：人体解剖学：人民卫生出版社，1978，p.19.
7. 山室 静：ギリシャ神話：教養文庫，1962，p.20.
8. 山室 静：同上：pp.145-146.
9. Evslin B: *An Encyclopedia of Greek Mythology*, Scholastic Book Service, 1975.
(小林稔訳：ギリシャ神話小事典；教養文庫，1993) p.110.
10. Kahle WH, Leonhart H, Platzer W: *Taschen atlas der Anatomie*, 1986. (越智淳三訳：解

剖学アトラス：文光堂，1990） p.340.

11. 山室 静：同上：p.108.
12. 森 優：同上：p.47.
13. 間 二郎訳：ギリシャ・ローマ神話のことば：
p.117.
14. 間 二郎：同上：p.99.
15. 間 二郎：同上：p.103.
16. 森 優：同上：p.103.
17. 小川鼎三他編：医学大辞典：南山堂，1990，
pp.1585-1586.
18. 後藤 稠他編：最新医学大辞典：医歯薬出版，
1987，p.1162.
19. 森 優：同上：p.38.
20. 間 二郎訳：同上：p.74.
21. 間 二郎訳：同上：p.16.
22. 山室 静：同上：pp.195-199.
23. 小林 稔訳：ギリシャ神話小事典：pp.229-230.
24. 間 二郎訳：同上：p.42.
25. 小林 稔訳：同上：p.200.
26. 小稲義男：新英和大辞典：研究社，1980，s.v.
“Morpheus.”
27. 間 二郎訳：同上：p.43.
28. 小林 稔訳：同上：p.170.
29. Webster M： *Webster's Medical Desk Dic-
tionary*：Merriam-Webster Inc. 1986，s. v.
“priapism.”
30. 小林 稔訳：同上：p.207.
31. 小稲義男：同上：s.v. “satyr.”
32. 後藤 稠他編：同上：p.130.
33. 小林 稔訳：同上：pp.67-68.
34. 小林 稔訳：同上：p.68.
35. 小林 稔訳：同上：p.68.
36. Webster M： *ibid*：s.v. “Eros.”
37. 加藤正明他編：精神医学辞典：弘文堂，1981，s.v.
“narcissism.”
38. 加藤正明編：同上：s.v. “narcissism.”
39. 間 二郎訳：同上：p.143.
40. 加藤正明編：同上：s.v. “Oedipus complex.”
41. 小林 稔訳：同上：pp.70-72.
42. 加藤正明編：同上：s.v. “psychiatry.”
43. 山室 静：同上：pp.217-218.
44. 山室 静：同上：pp.185-194
45. 間 二郎訳：同上：p.146.

Medical English Terms Derived from Greek Myths

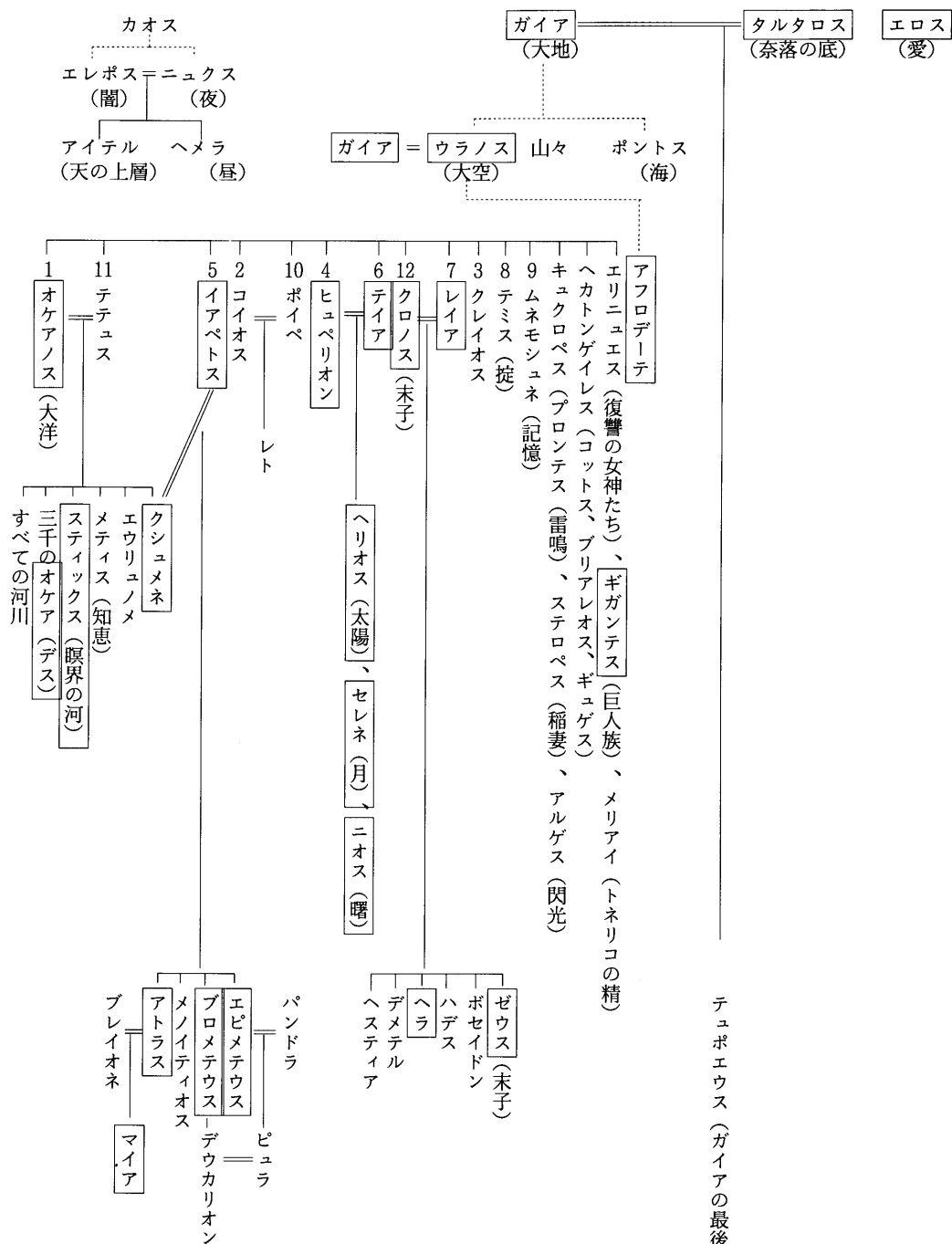
Masashi Kimura¹ and Takashi Yamadori²

ABSTRACT: It must be both painstaking and boring for the students of medicine and allied medical sciences to memorize thousands of medical terms one by one in the limited schedule. The teaching of those technical terms is also painstaking and boring on the part of the instructors. If some interesting episodes on medical terms such as Adam's apple and Achilles' tendon are introduced in the course of their teaching, it would give a kind of relaxation and stimulation to their learners. Fortunately some dozens of medical terms derived from Greek myths have such interesting episodes filled with gods, semi-gods, heroes, and nymphs. They are all described very vividly as supernatural beings with human feelings. This paper deals with 19 medical English terms derived from Greek myths, classifying them into three categories, i.e., anatomical, pathological, and psychiatric or psycho-analytical fields. The authors also try to describe their historical backgrounds and relieve their general characteristics.

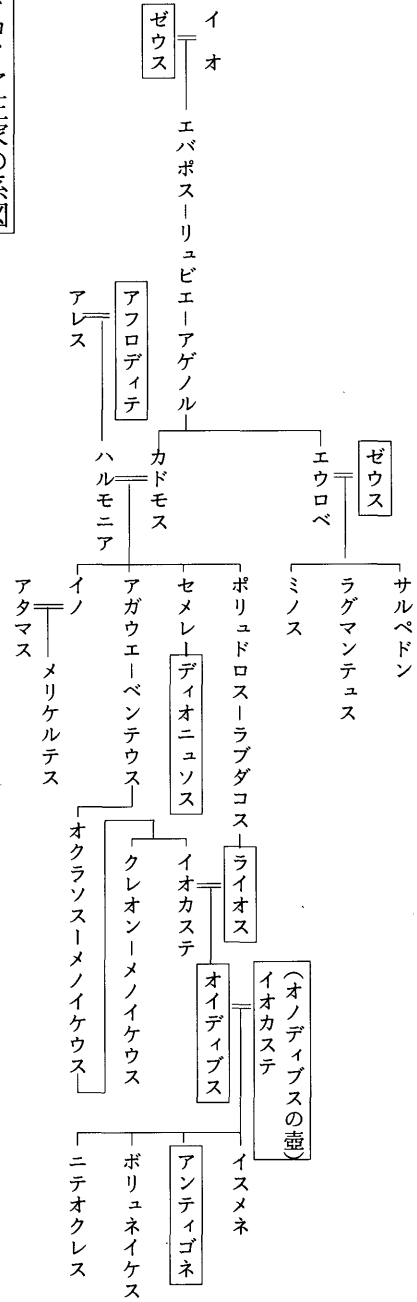
Key words : Medical English terms,
Greek myths,
Anatomical terms,
Pathological terms,
Psycho-analytical terms.

1. School of Allied Medical Sciences, Kobe University

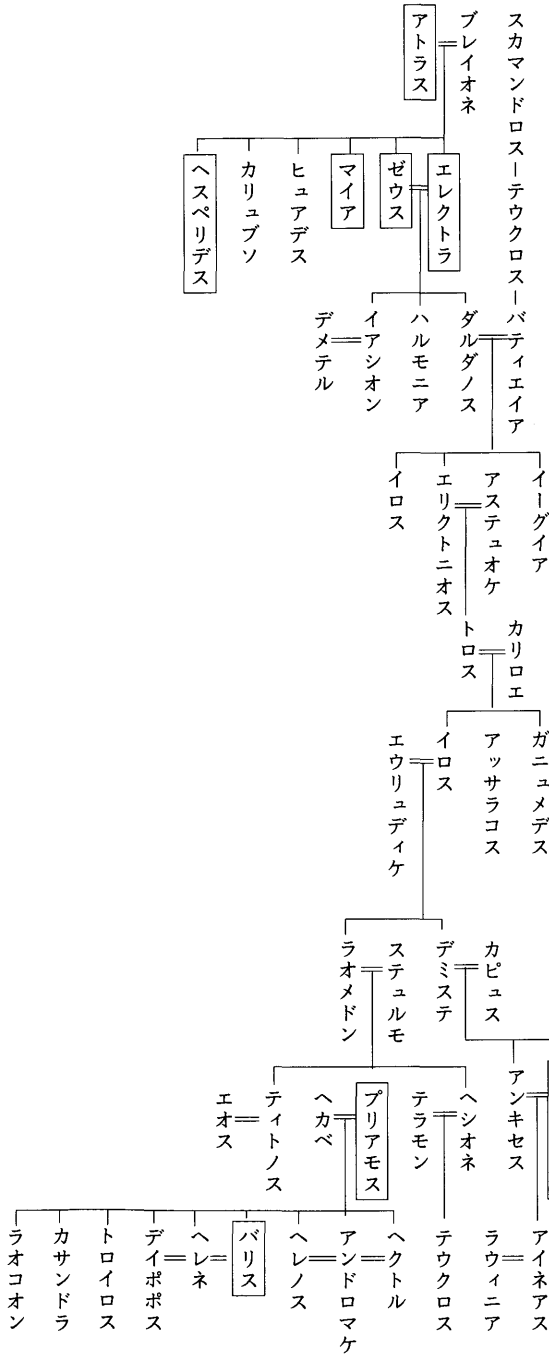
2. Kobe University School of Medicine



テーバイ王家の系図



トロイア王家の系図



□ は本論文中で言及された神々または人物を示す

系図 (2)